
戸惑い

星空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戸惑い

【Nコード】

N1077A

【作者名】

星空

【あらすじ】

周囲に気を使いながら生きる瑤子。そんな彼女はいつもどこでもみんなから慕われる。でも本当の彼女は・・・。

第一話 プロローグ

瑤子はため息をついた。どうしてこうも疲れるのだろう。家に帰り着くとほとんど毎日だった。ソファアに深く座り込んだまま、そこからなかなか起き上がれない。何も考えずにぼーっと空中を見つめる。体の力がだんだん抜けていき、心の中が空っぽになる。もう何も聞こえない。何も目に入らない。このまま眠ってしまいたいと思いつつも、頭の真ん中が妙に覚醒している。こんな時は、自分の意思というのが、まるで何の役にも立たないものである。

「おはようございます。」

「おはよう。」

朝の挨拶の時も瑤子は笑顔を忘れない。いつも、誰に対しても、公平に分け隔てなく接した。そんな彼女を嫌う人は、社内にも一人もいなかった。特に同僚からは絶大な信頼を得ていた。

「瑤子さんってやさしいわよね。」

「あら、そんなことないわよ。」

「矢崎さんも幸せね、瑤子さんみたいな恋人がいて。」

「そんな風に見える？ 実際は別にそんなことないのよ。」

瑤子の周りには、いつも人がたくさん集まってきた。彼女は周りに気を使わないのだ。

「ねえ、ちょっと聞いてよ。部長ったらね……まったくもう頭にくるったらありやしないわ！」

そんな文句にも、瑤子は

「うんうん、そうなの、そうなの、それは大変だったわね……」
という具合に親身になって耳を傾ける。すると決まって相手の顔に笑顔が戻る。そしてみんな言うのだった。

「瑤子だけよ、私の気持ちわかってくれるの。」

3歳年上の矢崎は、そんな瑤子にいつも言うのだった。

「君はこんな会社さっさと辞めて、カウンセラーにでもなったほうがいいんじゃないか。」

勿論、悪い意味ではない。瑤子の素質を見抜いての、恋人の言葉だった。

「やだな、そんな難しい仕事、私にできるはずじゃないの。」
瑤子はさらっと答えた。でも、本気でそう思っていた。（こんな私に、そんな難しい仕事できるはずないでしょ・・・）

本当の自分。それは恋人の矢崎にさえわかってもらえていない。

（本当の私はそんないい人なんかじゃないのよ・・・）

時々瑤子は、ため息については決まって遠くを見つめる。でもそんな様子も誰にも気づいてはもらえない。勿論、そばにいる矢崎にさえ、まるで気づいてはもらえなかった。

第二話 親友

「ねえ、瑤子、今週の金曜日付き合ってよ、お願い。」

「ごめん、その日はだめなのよ。」

「あーん、残念だな。」

「ごめんね、弘美。」

いくら親友の頼みでも、その日はどうしてもはずせなかった。残念がる弘美に瑤子が言った。

「じゃ、こういうのはどう？あなたたち二人と、彼とで出かけたら？」

「え？矢崎さんひとりに付き合ってもらうっていうこと？」

「ええ、そうよ。」

しばらく考えてから、弘美が答えた。

「それもいいかもね。」

弘美は瑤子とはずいぶん性格が違った。付き合う男性の数も、半端じゃなかった。恋に破れると、必ず瑤子に泣きついて、次の日はけろっとしてしまう、明るい、というか、さっぱりとした性格の持ち主だ。それに彼女は、別れた男ともまた普通に友達のようにになれる。瑤子には考えられなかった。でも、お互いに違う性格だから、5年もの間、親友でいられたのかもしれない。

弘美はまた、新しい彼に目をつけて、デートに誘っていた。そこに、瑤子と矢崎を呼んで、4人で一緒に飲みに行こうという計画だった。

でもその日はあいにく、瑤子は大好きなミュージシャンのコンサートにひとり出かけることになっていた。あの有名なギタリストのラリー・カールトンだ。もう1ヶ月も前からチケットを予約してい

たのだ。

「なんだ、瑤子は行けないのか・・・」

「ええ、そうなのよ、ごめんね矢崎さん。」

早速次の日矢崎が瑤子に話しかけてきた。

「でも弘美のために行ってあげてね、お願いだから。」

「あんまり気が進まないけど、ま、仕方ないかな。」

「ひろみの恋が成功するように、うまくやってね!」

「どうなることやら。まあ、うまくいきそうになったら、俺はお先にさっさと帰ってくるさ、ははは。」

「そうね、それがいいわね。」

結局、矢崎と弘美、そして弘美のお目当ての彼と3人で、出かけることになった。そしてそれから瑤子は、もうそのことに関して、別に何も考えることもなかった。そう、あの出来事が起こるまでは。

第三話 弘美の失恋（前書き）

矢崎が弘美と高田の恋のキューピット役を勤めようとしたが、せつかくのダブル・デートはなかなかうまくいかなかった。

第三話 弘美の失恋

瑤子の親友、弘美がデートの場所を選んだのは、彼らがいつも行く居酒屋だった。夜の7時、もう既にお店は人が結構入っていた。弘美は、入り口の近くのなるべくわかりやすい所に席を取り、二人を待っていた。

「やあ、遅れてごめん。」

そう言いながら暖簾をくぐって入ってきたのは、お目当ての彼、総務の高田だった。

「あれ？きみひとり？」

「ううん、あとからくるよ・・・」

弘美が言い終わるや否や、矢崎が暖簾をくぐり、店に入ってきた。

「何だ、矢崎さん、こんばんは。いつもお世話になって・・・一緒に言うのは矢崎さんのことだったの。」

「あら、二人とも知り合いなの？」

「そりゃあそうだろ、あんな小さな会社なんだから、なあ、高田。」

「そうですよ、矢崎さんならよかった、よく知ってる人で。あれ？

・・・じゃ、瑤子さんもしかしてくる？」

テーブルには、最初に注文した生ビールがおとうしと一緒に運ばれてきた。

「瑤子は来れなくなっちゃったのよ。」

乾杯したあと、生ビールを一口飲むと、弘美が言った。

「そうか、残念だな。せっかく瑤子さんに会えるかなってちよっと期待しちゃったのに。」

「あら～高田君、瑤子はもう矢崎さんの彼女なのよ。」

ちよっとふざけた調子で弘美が言った。

「そんなの知ってますよ、でも、俺結構あこがれてたんですよ、彼女に。矢崎さんの彼女じゃなかったら、俺もアプローチするんだけどな。」

そう言いながら笑うと、弘美の目の前に座っている高田は生ビールをおいしそうに飲んだ。弘美は内心穏やかではなかったが、平静を装って、何とか話題を変えようとした。

「ねえねえ、高田君、お酒はいけるほうなの？」

「結構いけますよ、大体ビールが多いですけど、日本酒も好きですよ。」

「そう、じゃよかった。ね、なにがいい？食べ物。」

そういうと、メニューを見せながら、料理を選び始めた。それぞれが何品かを注文すると、また高田が矢崎に話しかけた。

「矢崎さん、瑤子さんってどんな人ですか？優しそうですね。」

「あ、まあな・・・」

矢崎は困った顔で弘美を見た。

弘美は何事もないような顔をして

「瑤子って、誰にでも優しいのよ。ね、矢崎さん。私は5年も付き合ってるけど、彼女って本当おとなしいのよ。いつも人の話の聞き役。」

「そうだな、瑤子ってそういうタイプだな。」

矢崎も答えた。

「いいなあ、今度俺も話聞いてもらおっかな。」

「おいおい。」

そう言いながら矢崎は笑った。チラッと横目で見た弘美の顔には、笑顔はなかった。矢崎は、このまじい雲行きを何とかしなくては、と思いながら、どうすることもできなくなっていた。高田の飲み方は、結構ピッチが早かった。

生ビールをお替りしながら、また高田は口を開いた。

「弘美さん、弘美さんは彼氏いないんですか？」

「あら、いないわよ。どうして？」

「や、ちよっと噂で聞いたんですけど、結構いろんな人と付き合ってるって。」

「やだな、そんなことないわよ。」

矢崎は口を挟んだ。

「弘美は結構派手に見えるけど、内面は割と女らしいんだよな。」

「ええ、そうよ。あはは！」

「そうなんですか、あれ？ 矢崎さん、何でそんなこと知ってるんですか？」

「ああ、俺も弘美とは結構付き合い長いからな。」

「あ、あやしいな。二人、結構できてたりしてね。」

とうとう弘美が我慢しきれなくて言った。

「ちょっと待ってよ、そんなわけないでしょ、矢崎さんに失礼よ。」

「あ、いえいえ冗談ですよ、冗談。さ、今日は楽しく飲みましょう。」

矢崎と弘美は顔を見合わせた。

おいしそうにビールを飲みながら、悪びれた素振りもなく、会社の事、好きなアイドルの事、趣味のつりの事などを話す高田は、明るくあっさりとした性格のようだった。根は悪い人ではなさそうだった。弘美はその明るさに好感を持ったわけだし、一緒に飲んでいて楽しい人ではあった。ただ、彼の中に弘美は特別な存在としては映っていないようだった。

「なあ、高田。」

「え？ 何ですか、改まって矢崎さん。」

「お前さ、弘美の事どう思う？」

「ちょ、ちょっと矢崎さん、いきなり何を言うの。」

あわてて弘美が話をはぐらかそうとした。

「弘美さんですか？ 明るくていい人ですよ、ね。あれ、もしかして矢崎さん、俺と弘美さん、くっつけようとしてる？」

「あはっ、そんなわけないでしょ？ ねえ？」

弘美がどきまぎしながら矢崎にふった。

「え？ あ、ああ。いや、別にそういうつもりじゃないんだけどさ・・

。でも、どうかな、って思って・・・さ。いや、俺から見たらお似合いじゃないかなって思ったもんだから・・・」

急に高田がかしこまって頭を下げた。

「申し訳ないです。俺、実は彼女いるんですよ。でも・・・」

「でも？」

「最近うまくいってないんですよ・・・」

なぜか高田と彼女のいろんな話になり、いつのまにか二人が聞き役の、身の上相談になってしまっていた。二人は一生懸命恋のアドバイスをした。二人とも何だか高田を応援したくなっていたのだった。時計はもう8時半を回っていた。

突然電話が鳴ったので、高田が席をはずした。

「ふゝ何だか変な展開になっちゃったな。」

「本当ね。」

「彼女いるって知ってたの？」

「ううん、全然・・・あーあ・・・この前みんなで飲んだときはそんなこと言ってなかったんだけどな・・・」

高田がそそくさと戻ってきた。

「すみません、ちょっと例の彼女からの電話で。お先に失礼します。お金、これで、お願いします。」

「あ、そう、わかった、じゃあ気をつけてな。」

またもや二人は顔を見合わせた。

第三話 弘美の失恋（後書き）

意外な展開になってしまったダブル・デート。果たして弘美の恋の行く末は？

第四話 浮気心（前書き）

- ・ 失恋した弘美を慰める矢崎。果たして、これからの二人の関係は・・

第四話 浮気心

「ひ・ろ・み・ちゃ・ん・・・残念だったね。」

ビールのジョッキを持ちながら、矢沢は、弘美の隣の席から向かい側の席に移動しながら、そっと声をかけた。

「ほんとね、あーあ・・・つかれる。」

「でもさ、高田は弘美には似合わないよ、全然。」

「そうかもね・・・彼女がいたんじゃないよね。私としたことが、何やってんだろね、全く。」

「あはは！今までの弘美の恋は、大体うまくいったかもな。」

「そうよ、そうなのよ、でも今回は大失敗だわ。」

「でもさ、よかったよ、高田に彼女がいるって、もっと後で知ったら、結構ショック大きいと思うし。あいつ、ああ見えて結構正直でいいやつだったな。」

「あら、そうかな、何だか私、高田君の意外な面を見ちゃった気がするな。」

「ま、そうともいえるか。さ、飲みなおそう。」

弘美は矢崎の優しさが嬉しかった。

「ありがとう、矢崎さん。」

「何の何の。ま、元気出してよね。」

「そうね。ほんと、瑤子は幸せね、矢崎さんみたいな恋人がいて。」

「いや、どうかな、それは。」

「え？」

瞬間に矢沢の顔が曇ったように見えた。でも、弘美はその先、声をかけづらかった。瑤子とのことには触れてはいけないような、そんな気がした。

弘美が見事に失恋したその夜、結構ショックだった彼女の心を、

矢崎の存在が慰めてくれた。

「送っていくよ。」

「はい、お願いします。」

そう言いながら弘美は、矢崎の右腕に自分の左腕をかけると、ふふっと笑った。矢崎は一瞬ドキッとしたが、でも、ただのおふざけだとすぐに思い直して言った。

「しょうがないな、弘美ちゃん。今日のところは、付き合っただけよう。」

弘美は、嬉しそうに笑った。

「今日は矢崎さんを借りますよ、瑤子さ〜ん。」

空に向かって弘美が叫んだ。矢崎は、そんな弘美をかわいいと思った。

夜風が、酔った二人には心地よかった。

「じゃ、この辺で。今日はありがとう。」

「大丈夫？ 帰れる？」

「大丈夫大丈夫。ここまで送ってくれたら、もう帰れるから。」

「そうか、じゃ、またね。」

「うん、ありがとうね。」

そう言うと弘美は、大通りをひとり歩いて帰って行った。この先の角を曲がると、弘美の住むアパートがある。その後姿を見送りながら、矢崎は、右腕に残った弘美のぬくもりを感じていた。時計を見ると、10時を回っていた。

手を上げてタクシーを停めると、矢崎もひとり、自宅のマンションに向かった。弘美のぬくもりを感じる・・・そんな自分の浮気心に気づき、矢崎は少し自己嫌悪に陥っていた。

第四話 浮気心（後書き）

矢崎の心にふっと入り込んできた弘美。瑤子とはこの先、一体どうなっていくのか・・・

第五話 ライブハウス（前書き）

瑤子はライブハウスに来ていた。自分が最も自分らしくなれる場所。この場所でどんな出来事が起こるのか、そんな素敵な予感に、瑤子はわくわくしていた。

第五話 ライブハウス

瑤子が東京、青山のライブハウスに着いたのは、5時半だった。もう既に16番目。いつもの事だ。これ以上早く並ぶことは物理的に不可能なので、まあ、大体こんなものだ。

6時開場まで、あと30分ある。テイク・アウトのコーヒーを飲みながら、時間がくるまで待つ。これもいつもの事だ。

常連客が、やっぱり前のほうに並んでいる。いつも見る顔だ。前回のツアーの時にラリーと英語で親しそうに話している人も、前のほうに並んでいる。確か、あれは横浜のライブハウスでのことだった。毎年、東京が終わると横浜で、その後が大阪、福岡という具合にツアーを組んでいる。さすがの瑤子も、大阪や福岡までは行けないうが、東京と横浜はほとんど参加しているので、もう常連客の一人といってもいいかもしれない。それくらいファンなのだ。

矢崎とは一度だけ一緒に来たことがある。そのとき、彼はそれなりに感動したらしいが、でも2度目になるとさすがに、お一人でどうぞ、という具合だ。彼と瑤子の趣味は少し違うかも知れない。

瑤子の後ろに駆け込んできた男性がいた。走ってきたらしい。息を切らしている。スーツを着て、ビジネスバッグを持っているところを見ると、どうやらサラリーマンらしかった。しきりに時計を気にしていた。

「コーヒーか、賢いですね。」

突然瑤子に話しかけてきた。

「ええ、まあ。」

そう答えながら瑤子は微笑んだ。

「6時半からでしたよね。」

「そうですよ。」

「楽しみです。また去年と同じバンドでしょうか？」

「ええ、多分そうですよ、夕ベネットで調べてみたら、ブルースバ

ンドってありましたから。」

「そうですか、じゃ、ますます楽しみだな。教えてくれてありがとう。」

「どういたしまして。」

ふと見ると、どんどん後ろに長い列ができていた。瑤子がもう一度前から数えてみると、確かに自分は16番目だった。16番目ということは、果たしてどの辺の席でみることができだろうか。もっぱら瑤子の頭の中は、どこの席に座れるのかということदैいっぱいになっていた。

そんな時、携帯メールが入ってきた。矢崎だった。

『もうすぐ居酒屋に着くよ。どう？楽しんでる？』

『お疲れ様。弘美の事よろしくね。』

そんなやり取りをしているうちに、丁度6時半になって、次々と番号が呼ばれていく。瑤子はわくわくしてきた。前の人に連なり、店内に案内されていく。おもったよりも2ndステージの人が多く、瑤子のように1stステージで並んでいる人が少なかったのか、今までで一番前の席をゲットできた。前から2列目のテーブル。ステージに向かってやや左方向、もう、すぐ目の前でラリーの演奏を見ることができる。去年と同じバンドであれば、右側のほうにホーンセクション、左がキーボードのはずなので、この席が丁度いい席だった。

ふと見ると、さっき後ろに並んでいたサラリーマン風の男性が、瑤子の向かい側の席に合席となった。

「あら」

「どうも、ここいいですか？」

「ええ、どうぞ。」

一人で来ると、必ず合席になる。もう慣れている。ここは大人の空間。大人の社交場。ほんのり薄暗くて、とても素敵な雰囲気だ。集っている客層もみんな紳士的で、おいしいお酒と食事、それにお気

に入りのミュージシャンの生の演奏が聴ける。瑤子の一番のお気に入り場所だった。

「なかなかいい席でしたね。」

「そうですね、よかったです。」

瑤子も、目の前の彼も、とても上機嫌だった。

瑤子はハイネケンのビールを一つ注文すると、開演を待った。携帯を見てみると、もう圏外の表示が出ていた。地下に位置するこの空間では、携帯電話は使えないのだろう。一瞬矢崎たちのことが気にはなったが、もうその時点ですっかり忘れてしまった。それくらい瑤子の心は、この大きな箱のライブハウスの中に、どっぷりと浸っていた。

第五話 ライブハウス（後書き）

このステージは、もしかしたら瑤子のこれからの人生を大きく変えてしまうのかもしれない。矢崎との関係はどう変わっていくのか？
そして弘美は・・・？

第六話 ライブハウス 2 (前書き)

いよいよ感動のステージ。瑤子は幸せいっぱいだった。

第六話 ライブハウス 2

ライブは想像以上の盛り上がりで、ラリーの渋いギターもさる事ながら、ベーシストの指裁きに瑤子は圧倒されていた。リズム感といい、安定感といい、瑤子の好みのベーシストだった。彼女は完全に心を奪われた。

向かいの男性も、瑤子に負けず劣らず、大喜びでリズムに乗っていた。グラスビールを3杯ほど飲んで、ちょっとしたおつまみも注文していた。

「よかったですぞ。」

「あ、ありがとう。」

瑤子はビール以外には何も注文していなかったので、フライドポテトを少し分けてもらった。

途中でラリーが楽屋に戻った。ステージの上は、ドラムとベースだけになり、リズム隊のソロをこの上ない迫力で聴かせてくれた。開場はもう完全に大フィーバーだった。

再びラリーがステージに戻ってくると、あの有名な『ルーム335』を新しいアレンジで演奏してくれた。瑤子は感動で泣きそうだった。まだ学生時代だったあの頃の、懐かしい曲。『335』は彼女の青春だった。そして、この会場にいるほとんどのファンの人が、この曲を聴きながら感動しているはずなのだ。それくらい名曲中の名曲だった。

あつという間の2時間だった。帰りがけにラリーと握手できた。もう50歳をとうに過ぎたであろういぶし銀な彼に、大人の魅力を感じていたのは瑤子だけではないだろう。短く刈り上げた頭髮には、白いものが混ざり、演奏しながらタバコをくゆらせるその姿は、た

まらないほどセクシーだった。洗い立ての白いオーバーシャツが、彼をますます素敵にしていると思った。そんな余韻に浸りながら、瑤子はゆっくりと会場を後にする。

「よかったですね、ステージ。」

「ほんとね。」

席を立ちながら、ちよつとだけ向かいの男性と言葉を交わした。静かに微笑むと彼は

「またね。」と言いながら右手を上げて、彼は瑤子より先にレジに向かった。

瑤子は（またねって・・・え？今なんて言った？）そんなことをふっと思い、一瞬戸惑いを感じた。でも、次の瞬間にはもうそんなことはすっかり忘れて、彼の後に続いてレジに並んだ。大勢の人の流れの中で、いつの間にかあの男性の姿はどこかにまぎれてしまった。一歩外に出ると、ライブハウスのあの大きな箱の中の感動のステージは、まるで夢の中の出来事のように感じた。心地よい夜風は、何事もなかったかのように瑤子のそばを通り過ぎていく。そしていつの間にか人の流れも途切れ途切れになって、ますますライブハウスは遠くなり、瑤子は自分が現実の世界に連れ戻された気がした。

来週は横浜だ。もうチケットの予約は済んでいる。そんなことをふと考えながら、瑤子は駅までの道を一人幸せな気分で歩いた。

自宅にたどり着くと、時計はもう10時を回っていた。（そうそう、弘美はどうしたかな）携帯メールのセンター問い合わせをしてみるが、何も入っていなかった。一瞬変だと思ったが、別に特に気にかけることもなく、シャワーを浴びると冷蔵庫から缶ビールを一本取り出した。（今日はステージの余韻に浸って眠ろう・・・）ほろ苦いビールを一口飲むと、BGMにラリーのアルバムをかけて、瑤子は静かにベッドに腰を下ろした。

第六話 ライブハウス 2（後書き）

余韻に浸りながら、一人ベッドの上で缶ビールを開ける。今後、瑤子の周りに変化が訪れるなんて、知る由もなかった。

第七話 恋心（前書き）

失恋した弘美は、思いがけず矢崎の優しさに触れ、気持ち揺れ動いていた。そして矢崎も・・

第七話 恋心

「おはよう。」

「あ、おはよう、弘美。昨日のデートはどうだった？」

「あれ？瑤子、矢崎さんから聞いてないの？」

「ええ、聞いてないわよ。」

弘美は、思った。（瑤子と矢崎さん、もしかして・・あまりうまく
いってない？）

「あのね、高田君、彼女がいたのよ。」

「あら、そうだったの、残念ね。弘美、でもそれにしては元気ね。
いつもはもっと落ち込むじゃない。」

（落ち込まなくてすんだのは矢崎さんのおかげ。）

そう心で思ったが、そんな言葉を飲み込む。

「ま、それほど思い入れがなかったっていうこと。」

「へーそうだったの。そんな風に見えなかったけどね。」

本当は瑤子の言うのが正しかった。いつもだったら、もっと落ち込んで瑤子に愚痴をいっぱい聞いてもらうところかもしれない。でも今回は、矢崎がそばにいて慰めてくれたから、それでもう十分だった。というより、失恋した弘美の心に優しく寄り添ってくれた矢崎に、ふと恋心が芽生えてしまったからかもしれない。弘美にもよくわからなかった。ただ、夕べから急に、矢崎のことが気になり始めているのは確かだった。

昼休み。矢崎からメールが入った。

『ランチ一緒にしよう。』

瑤子は『OK!』とメールしておいた。

弘美がやってきた。

「瑤子、ランチ一緒にどう？」

「あ、ごめん、矢崎さんと一緒に行くんだ。」

「知ってる、知ってる、矢崎さんから誘われたのよ。」

（え？なんで？）一瞬瑤子は戸惑いを感じたが、気を取り直して答えた。

「あ、そう。わかった、じゃ一緒に行こっか。」

（きつと昨日のことを話そうと思ったからか。）瑤子はそんなことをふと思った。

しかし、矢崎に誘われたというのは弘美の嘘だった。彼女は急いで矢崎にメールした。

『昨日はありがとうございましたm（　　）m一緒にランチでもどうですか？瑤子を誘ってみたら、矢崎さんも一緒に聞いたから（　　）』

程なくメールが帰ってきた。

『了解。元気になった？昨日のショックは大丈夫？』

『大丈夫、ありがとう。でも矢崎さんがいなかったらどうかかわからなかったな。そばにいてくれて本当に嬉しかったです！』

『それは良かった。じゃあとでね。』

『はい^^矢崎さんって優しいですね☆』

『いや、そんなことないさ。』

なぜかやり取りが今までになく長かった。弘美のメールで矢崎の心も何だか癒される気がした。昨日から矢崎は弘美の事を純粋に心配していた。一応彼は夕べ、恋のキューピット役だったわけで、それなのに弘美は悲しい失恋をしてしまった。少しだけ責任を感じていた。そのせいか、同情というのか優しさというのか・そんな気持ちを自分なりに弘美に向けていた。でもそれは別にいやなことではなかった。自然の成り行きで、弘美の心に寄り添っていたのだった。ほおっておけなかったのだ。同時に、自分が必要とされていることが嬉しかったのかもしれない。でも彼は、そんな自分の気持ちを見ないようにしていた。しかし、そう思えば思うほど、なぜか弘美のことを心配してしまう自分がいた。

第七話 恋心（後書き）

矢崎と弘美そして瑤子、果たしてこれからの三人の関係は・・・？

第八話 移り気（前書き）

矢崎に惹かれる弘美は、自然と嘘をついてしまった。そして矢崎は、その嘘に少しずつ乗せられていく。

第八話 移り気

瑤子は、目の前の失恋したての弘美に気を使っていた。そして、隣に座っている矢崎も、しきりに弘美を慰めていた。

「彼はいいやつだけど、弘美には合わないって感じだったよ。」
矢崎は瑤子に説明した。

「そうだったの、でも、弘美のほうもそれほど、って感じだったんでしょ？」

そう瑤子が弘美に尋ねた。

「そうね、そういわれればそうかも。」

そう答えると、弘美は食後をコーヒーを飲み干した。

「そうなのか？弘美。俺は結構ショックなのかと思ったよ。」

矢崎も、コーヒーを飲みながら弘美に尋ねた。

「確かに、ショックはショックだったわ・・・」

瑤子は、怪訝そうに矢崎の顔を見た。矢崎もきつと瑤子の方を見ると思った。でも、矢崎は弘美をとて心配そうに見ていた。（何だか、弘美、言ってることが違うみたい。）正直瑤子はそう思った。

弘美は、といえば、寂しそうな表情をしていた。（朝はそれほど落ち込んでないって言ってたのに、今は何だか落ち込んでる。どっちが本当なのかしら・・・）瑤子はちょっと不思議に思っていた。

「そろそろ行こうか。今日は俺のおごり。」

伝票を持つと、矢崎はレジに向かった。瑤子と弘美は、礼を言うと、先に外に出た。

「ねえ、弘美。」

「え？」

「ほんとはどうだったの？そんなにショックだったの？」

「お待たせ。」

矢崎の声で、二人の会話は途中で終わった。

相変わらず元気のなさそうな弘美を、矢崎が気遣っている。男の

ほうが優しい、というのは、こういうときの態度から言うのかもしれない。そして反対に、女性同士というのは、見方が厳しいものなのかも知れない。瑤子は弘美のことをさほど心配してなかった。でもまだその時の瑤子は、少しも気づいていなかった。恋人の矢崎の心が、弘美に少しずつ移り始めていたことに。

第八話 移り気（後書き）

何かがおかしいと気づき始める瑤子。弘美への同情が愛情に変わりつつある矢崎。そして弘美は、親友の恋人を、いけないと思いながらも・・・

第九話 携帯メール（前書き）

親友の恋人に心惹かれていく弘美。そして、矢崎もだんだん弘美の事が気になり始める。

第九話 携帯メール

少しずつ弘美からのメールが増えていく。

『矢崎さん、おはよう^^』『今日はあったかいですね』『ねえねえ、昨日のテレビ見ました?』『・・・たわいもないメールだったが、いつのまにか、矢崎は彼女からのメールを待つようになった。一日に多くても2・3通くらいだった。それほど多くはない。しかし、だから余計待つようになったのかもしれない。メールというのは、不思議な効果を持っている。だんだんマジックにかかってしまうような感じだった。』

『昨日眠れなかったの。は〜(;;) まだ私、失恋から立ち直ってないのかも。』

『そうか・・・そんなにすぐに立ち直れるものじゃないさ。』

『ありがとう、慰めてくれて。・・・そうだ、明日の夜、飲みにいきません?』

『いいよ、いやなことは、時には飲んで忘れるといいよ。』

弘美は内心（やった〜）と思った。自然に矢崎を誘うことができたのである。二人きりで飲むのは、これが初めてだった。いろいろ考えた。でもやっぱり一番自然なのは、彼のほうから弘美を好きになってもらうこと。だって、弘美から告白するわけにはいかない。理由は簡単。親友の恋人だから。ただそれだけ。

その夜弘美は、わくわくしてなかなか寝付けなかった。

瑤子は明日の夜、再びラリー・カールトンのライブだった。今度は横浜。東京のときと同じように、また心が躍っていた。そんな時、メールが入った。

『明日の夜、弘美に誘われたんだけど、一緒に飲み行かないか?』
（え? なんで?)

どうして弘美が矢崎を誘うのだろう。どうしてだろう……。まさか……。(そんなはずないわよね) 瑤子は少し混乱した。でも、すぐに気を取り直した。(何か相談事があるのかも。) 矢崎に返信メールをした。

『あら、弘美からデートのお誘い?』

皮肉な埔里のメールをわざと送った。それだけ瑤子は、矢崎が自分を好きだということに自信を持っていた。

『そんなじゃなくてさ、失恋から立ち直れないらしいよ。』

(嘘よ。) あれ以来、弘美の様子は、矢崎が言うような「失恋から立ち直れない」という、そんなふうにはとても見えなかった。瑤子には隠しているのか。それとも、矢崎に対して嘘をついているのか。・・・? 何のために嘘を・・・? 瑤子は妙に頭が冴えていた。もしかして・・・ひょっとしたら、そのもしかして、かも知れない。弘美の気持ちは同じ女だからわかる。少し考えてから、矢崎にメールを返した。

『あら、弘美、かわいそうにね……。矢崎さん、じゃ、よく話聞いてあげてね。』

きっと矢崎はあわてるはず。瑤子のメールで、きっと言い訳を言い始めるはず。そんな気持ちで、皮肉たっぷりのメールを送った。

そのメールを読んで、矢崎は、少しむっとした。(なんていう返事なんだ。)

『君はこれないのか?』

再び矢崎からメールが入った。今度は瑤子がカチンときた。(どうして? 忘れたの?)

『私は明日はコンサートに行きます。前にそう言ったでしょ?』
そうメールを送った。二人の会話が少しずつすれ違っていく。

瑤子は、何だかむしゃくしゃしてきた。結局、弘美と矢崎が二人で飲みに行くということなのだ。瑤子がいらないのを知っていることではないのか。猜疑心さえ生まれた。しかし、そんな考えはすぐに打ち消して、矢崎からのメールの返事を待った。

矢崎の携帯電話がなった。

「もしもし。」

「矢崎さん・・・」

「どうした、弘美・・・」

「・・・」

「弘美？」

「・・・」

「一体どうしたんだ、弘美！」

電話の向こうで弘美のすすり泣く声が聞こえた。

「・・・ごめんなさい。なんでもないの。ちょっと矢崎さんの声が聞きたくなって。」

「どうしたんだ、大丈夫？」

「・・・うん。もう大丈夫。」

突然の電話に矢崎も困惑したが、泣いている彼女をほおって置けなくて、わけもわからず励ましていた。弘美は、寂しさに耐え切れず、矢崎に電話をした。そして、つい泣いてしまった。それは、けして狂言でもなんでもなかった。矢崎をそれほど思っていた。しかし、本心を言うことのできない苦しさゆえに、涙が出てしまったのだ。

弘美は矢崎を頼っていた。寄りかかってきたのだ。矢崎は、そんな弘美をかわいと感じた。

明日また会う約束をして、電話を切った。矢崎はその夜、複雑な思いに駆られた。（俺は何を考えているんだ。弘美は瑤子の親友じゃないか・・・）矢崎は一人、悶々としていた。そして、すっかり瑤子からのメールのことは忘れてしまっていたために、返事を返すことをしなかった。

矢崎から返信メールが来ないので、瑤子はきつと、矢崎は怒っているのだと思った。なぜなら、もともと一人でコンサートに行くことを良しと思っていなかった彼に、前日になってそれを伝える形になっ

てしまったからだ。勿論、彼には前から伝えていたつもりだ。でも、つい忘れたのだろう。しかし、瑤子はそんな矢崎を攻める口調でメールしたのだ。返信がないということは、きっと怒っているのだ。矢崎が良く取る手段だった。

第九話 携帯メール（後書き）

弘美は完全に矢崎に心を惹かれてしまう。そして矢崎も。そんなとき瑤子と矢崎は心がすれ違ってしまふ。果たして、二人の溝は埋まるのだろうか。それとも・・・。

第十話 嘘（前書き）

親友の恋人、矢崎に思いを寄せる弘美。つい携帯に電話をしてしまふ。寄りかかってくる弘美に、矢崎もついい心が動く。

第十話 嘘

次の日、会社で弘美と顔を合わせると、瑤子は言った。

「おはよう、弘美。」

「おはよう、瑤子。」

「ね、弘美、今夜矢崎さんと飲みに行くんですって？」

「そうなの、でも瑤子は来られないんでしょ？」

「え？あ、うん。そうなの。」

「残念だわ。せっかく3人で行こうと思っていたのに。」

弘美は、次から次とよく嘘が出るものだと思っても不思議に思った。

「どうして？」

「え？」

瑤子はストレートに聞いてみた。

「どうして、彼を誘ったの？彼は私の恋人なのよ。」

「あら・・・誘ったのは矢崎さんのほうよ。」

「そんなはずないわ・・・」

そう言いながら、瑤子は戸惑いを隠せなかった。

弘美はさすがに胸が痛んだ。本当に、どうしてこうも嘘ばかりつけるのだろう。

「ね、瑤子、瑤子は本当は矢崎さんのこと好きじゃないんじゃないの？」

「え・・・？」

「あ、ううん、なんでもない。冗談よ、冗談。違うの、今日は、矢崎さん、失恋した私を慰めてくれるつもりなのよ。本当は瑤子と一緒に、ね。でも瑤子は来られないって聞いたから・・・残念だなんて思って。どうして来られないの？」

瑤子は、少しくらくらしていた。弘美が自然に何気なく話してくる矢崎への信頼が、少しずつ崩れていくのを感じた。

「今晚はコンサートなのよ。」

「あら、今日も？」

「ええ、そうなの。」

「確か、この前もそうだったわよね。私がダブル・デートを企画した日。」

「ええ、そうよ。」

「そうか、なるほど・・・誰かと一緒に行くの？」

「いいえ、ひとりよ。え？なに？何かなるほど、なの？」

「ううん、なんでもない。じゃ・・・」

そう言うと弘美は自分の部署に戻った。

瑤子は心が揺れ動いていた。（いいえ、そんなはずはない、矢崎さんが弘美を誘うなんて・・・）

第十話 嘘（後書き）

弘美は、自然と瑤子に嘘をついてしまう。そのせいで、少しずつ矢崎に対する瑤子の信頼が崩れてきてしまう。矢崎への不信と、瑤子の心にできた隙間、これから彼らの三角関係は、一体どうなっていくのか・・

第十一話 出会い、そして・・・（前書き）

弘美と矢崎の事が気になりながらも、予定通りライブハウスにや
つてきた瑤子。そこで待っていたのは・・・？

第十一話 出会い、そして・・

瑤子はしきりに時計を気にしていた。完全にアウトだった。勿論、開演には間に合う。でも、この前の東京のように、良い席でラリー・カールトンを見るのはもう不可能に近かった。今日に限って上司に仕事を頼まれた。相変わらずいやな顔の出来ない彼女は、にこっと笑ってその仕事を引き受けた。

「ありがとう、西田さん、やっぱり君に頼むのが一番だよ。」

上司はそう言った。二つ返事で引き受けるので、『頼みやすい』のだろう。でも、おかげで会社を出るのが遅くなってしまった。せっかく用意周到に、早い退社を希望しておいたというのに。

弘美と矢崎の件もあるし、今日の瑤子はちよつと憂鬱な気分だった。電車に揺られながら、あれこれ考える。(嘘をついてるのはきつと弘美だ。矢崎さんは弘美に乗せられているだけ。ううん、違う、矢崎さんの心もしかしたら・・・)

ふと気づくと、横浜駅を通り過ぎてしまっていた。少し慌てたが、急行は次のみなとみらい駅にも止まるようだったので、安心した。本当はみなとみらいで乗り換えて、次の馬車道駅で下りたほうが近いのだが、今日はいつもと違って、みなとみらい駅で降りると、すぐにタクシーを拾った。気が気ではなかった。時計の針は、もう5時半を過ぎていた。開演時間は6時半なので、5時から開場は始まっているはず。完全にあきらめムードだった。でも、仕事のある日は仕方のないことだった。休みの日は、もっともっと時間に余裕を持って来るのだが、なかなかうまくそういう日にぶつかるとはない。

6時前に着くと、クロークで荷物を預け、すぐに会場に入った。想像通り、メインのアリーナ席はもういっぱいだった。かろうじてサイドの喫煙席と後ろのカウンター席に空席があるだけあった。とりあえず、カウンター席を一つ確保すると、また再び会場内を見渡

した。

アリーナ席のちょっと左よりのほうの席で、手を振っている人がいた。数ヶ所、2人、あるいは3人がけのラブチェアの用意してある場所があるのだが、その一ヶ所でその人は手を振っていた。あまり目の良くない瑤子には、それが誰なのかよくわからなかった。きつと待ち合わせの人なのだろうと、気に留めないでいると、その男性は、笑いながらカウンター席に座る瑤子のところへやってきた。だんだん近づくにつれて、その男性が自分のところにやってくるのだということと、その人は、この前の東京で顔を合わせたあのサラリーマン風の男性だということに、瑤子は同時に気がついた。

「やっと気がついたね。」

「あ、ごめんなさい、目が悪いの、それに、今日はお仕事お休みですか？この前と服装が全然違ってゐるわ。」

「あはは、今日は休みだったんだ。・・・ね、良かったら、こっちどう？」

手招きされながら、後からついていくと、とても良い席が一つ空いていた。にこっと笑い、瑤子に座るように目配せすると、係りの人に一人席を移動することを告げた。

とても良い席だった。前回の東京よりは少し後ろだが、横浜の場合、このラブチェアの席が、まっすぐステージに向いていて、ゆったりと寛ぎながらぼろぼろステージ全体を見ることが出来る場所だった。でも瑤子は一瞬ためらった。そんな様子をすぐに見て取って、彼はおどけて言った。

「何もしません、僕を信じてください。」

その様子があまりにおかしかったので、瑤子はふっと笑いながら「いえ、別にそんなつもりでは・・・。ありがとう、じゃ、お言葉に甘えて、お邪魔します。」

そうして2人は少しゆったりとしたラブチェアに並んで座った。

いざ座ってみると、瑤子はやっぱり少し恥ずかしかった。でも、一番後ろのカウンター席に座るよりは、はるかにましだった。

すぐに係りの人がメニューを運んできたので、いつものようにハインケンのビールを注文した。彼もそうした。

「遅くなりましたけど。」

そう言いながら、彼から渡された名刺には、こう書いてあった。

『岡崎探偵事務所』 岡崎裕也』

「探偵さん……ですか……。」

「はい！何かお困りなことでも？」

「あ、いえ、その……珍しいなと思って……。」

「まあね。良かったらあなたの名前も教えてくれませんか？」

瑤子はおかしさをこらえていた。岡崎は、なぜか話し方がユニークだった。自分でPCで作った名刺をバッグから取り出すと、瑤子は岡崎に渡した。渡してすぐに後悔した。なぜなら、その名刺には本名は勿論、電話番号やPCのアドレスが印刷しており、初対面の人に渡すようなものではなかった。でも、もう遅かった。

「瑤子さんっていうんですか、いい名ですね。そういえば、作家に森瑤子さんっていましたよね、同じ字ですね。」

「ええ、そうなんです。」

そう言いながら、運ばれてきたビールを一口飲むと、瑤子はいつものように遠くを見つめた。

岡崎は言った。

「瑤子さん、何かあったの？」

「……え？」

瑤子は驚いて右隣に座る岡崎の顔を見た。

彼は、ビールを持って、瑤子のグラスにカチッと当てると、一口飲んで言った。

「寂しそうな目をしてるから。」

瑤子は無言だった。なぜか涙が出そうになるのをこらえた。

「どうしたの？俺でよかったら聞くけど。……彼氏と喧嘩した、とか……？」

また驚いてしまった。何を根拠にそんな事いうのだろうか。

「彼氏の心が読めない、とか・・？」あ、わかった。彼氏が誰かに取られちゃいそう、とか・・でしょ。」

凶星だった。いや、違いかもしれない、そうかもしれない。すべて、何の根拠もないことだった。でもあまりに瑤子の心配事をびたりと読まれたので、つい彼女はビールを一気に飲んでしまった。

「まんざら違ってもないみたいだね。」

（どうして初対面の見知らぬ男にここまで言われなければいけないのだろう。）瑤子は腹が立ってきた。勿論、そんな素振りは決して見せやしない。

岡崎は自分もグラスを一気に飲み干すと、ビールのお替り二つと、チーズの盛り合わせ、それにポテトとサラダを注文した。

「今日のラリーはどうか。東京と曲順違うのかな。この比較が結構楽しいものだよ、ね、そう思わない？」

「・・・そうですね。楽しみです。」

そう言って微笑んだが、さすがの瑤子も、無理に笑ったので顔が引きつってしまった気がした。そんな様子を悟られまいとして、咄嗟に目をそらした。

会場の明かりが落とされた。いよいよだ。ラリーたちが入ってくる。後ろのドアが開き、ドラマーを先頭に、ベース、ホーン・セクション、キーボード、そしてギターのラリーカールトンと、総勢7人が、軽やかな足取りでステージに上がる。そして、会場はもう大フィーバーだった。瑤子も岡崎も、完全にステージに釘付けとなり、大拍手を送っていた。

オープニングからもうノリノリで、かなりハイ・テンションの曲だった。東京では確か、最後にやった曲だ。もう最高だった。

岡崎も瑤子も、顔を見合わせて上機嫌だった。大喜びだった。2人とも、今日のステージのほうがラリーたちがノっていると感じたようだった。

途中でメンバーが楽屋に戻った。休憩タイムだった。岡崎から勧

められて、瑤子はそのときにホッと一息ついて、サラダやチーズを食べた。とてもおいしい料理だった。ビールも3杯めをオーダーした。

ラリーたちは、すぐにまたステージに登場すると、雰囲気ガラッと変えて、スローなテンポの曲を演奏した。曲名まではよく覚えていなかったが、よく聴くナンバーに、二人は酔いしれていた。

もう、あっという間の2時間だった。2人は余韻に浸っていた。1stステージだけではなく、2ndステージも続けて見たかったが、席を予約していないので不可能だった。二人とも同じことを思っていた。

「ね、今度2ndステージも続けて見に来ない？」

岡崎は瑤子を誘った。

「それも良いわね。是非今度。」

二人は笑いながら、席を立った。

「送っていくよ。」

「え・・・？じゃ・・・駅までお願いします。」

「OK！」

ステージの熱気がまだ全然さめない状態の中、2人は興奮したままレジに並んだ。その時はまだ2人とも、このあと、どんな事が待ち受けているかなど、まるで予想もしていなかった。ただ、後ろ髪を引かれながら、熱い熱いライブハウスを後にした。

第十一話 出会い、そして・・・（後書き）

思いがけず、瑤子は岡崎という探偵と出会う。そして、新しい何かが始まる。果たして2人を待ち受けているものは・・・？

第十二話 思惑（前書き）

矢崎と2人きりで居酒屋に入った弘美。このチャンスを無駄にしない、と弘美はひそかに思っていた。

第十二話 思惑

「ね、矢崎さん、瑤子は？」

弘美は白々しく矢崎に聞いた。

「彼女はライブさ。」

「え？じゃ、ここに来ないの？」

「ああ、そうだよ。」

初めからわかっていた。今日、弘美が矢崎と2人きりでこの居酒屋に来ることは。でも、弘美には、まだまだ自分の本心を矢崎に知られるわけにはいかない。

「何だ、瑤子さん、来ないの。じゃ、矢崎さん、悪かったわね、お誘いしちゃって・・・。」

少し不機嫌そうに弘美が言うと、矢崎は、

「そんなことはないさ。」

ビールを一口飲みながら、にこっと笑って答えた。

「ありがとう、矢崎さん。でもね・・・」

「え？なに？」

弘美はもったいぶって、というか、言いにくそうに、というか・・・恥ずかしそうに矢崎に言った。

「・・・あんまり優しくしないでほしいの。」

「え？そうなの？まだどうして？」

「ううん、なんでもないんだけど・・・」

弘美は、演技ではあるが、それでも、もう矢崎に対してのほとんどの感情が抑えきれないでいた。（矢崎さん、私はあなたが好きなよ・・・）そんな彼女は、やはりお酒の勢いを借りなければ、まだ親友の恋人である矢崎に相対することが出来そうもなく、いつもよりも少しピッチが早かった。それを見ながら、矢崎は、失恋から立ち直れないであろう（と、勝手に矢崎が思っている）弘美のことをさらに心配していた。

「今の弘美を見てたらほっておけないさ。」

弘美は目が潤んだ。

「ありがとう、矢崎さん。」

矢崎は、弘美を支えなければいけない衝動に駆られた。

「・・・矢崎さん、私・・・」

「え？なに？」

「これ以上優しくされると、もしかしたらあなたを好きになってしまいかもしれないわ。」「え・・・？」

突然の弘美の告白に、矢崎は胸が高鳴るのを感じた。

弘美は、矢崎の様子を伺いながら、ゆっくりと口を開いた。

「お願いがあるんだけど。」

「なに？」

「今日だけ恋人になってくれない？」

「・・・それって、僕を誘惑してるの？」

「そう、めっちゃめっちゃ誘惑してる・・・」

2人とも、かなりその気になっていた。（今日だけ、そう今日だけなら・・・。）

人間というのは弱いものだ。寂しい心の隙間に、ふっと入り込んでくる。今日の彼らには、高まる感情をとめることが出来そうもなかった。

「恋人同士のように歩いて、恋人同士のようにデートしましょうよ。」

嬉しそうな弘美を見て、矢崎は（それから・・・？）とそんなことを心の中で反復しながら、そんな妄想を振り払った。（何を考えているんだ・・・）またもや自己嫌悪に陥る矢崎だった。

先に伝票を持って、弘美が店を出る。慌てて矢崎が追いかけた。

2人は、これからどうなっていくのか。すべては弘美の手の中にある。(私って悪い女かもしれない。) そう思いながらも、弘美はとても嬉しかった。

第十二話 思惑（後書き）

弘美の思惑とわかっていながら、矢崎は誘われるままに……。いよいよ次回がクライマックスです。

第十三話 浮気の調査? ? (前書き)

瑤子は探偵の岡崎に車で送ってもらうことになった。その途中で、思いがけず、瑤子は恋人の浮気調査を依頼することになる。

第十三話 浮気の調査??

「車・・・?」

「そうだよ。さ、プリーズ」

岡崎は、助手席のドアを開けながら、瑤子に向かって微笑んだ。自慢の愛車は、モス・グリーンのアルファロメオだった。

瑤子は少し戸惑いながら、スポーツタイプの輸入車の助手席に座った。見た目よりも室内は広く、快適だった。それにしても、車で送ってもらうとは思ってもみなかった。

「いつも車?」

「そう、ほとんどね。」

エンジンをかけると、カーステレオからはお気に入りの曲が流れた。とても良い音色だった。

「これ、ラリーの『サファイア・ブルー』ね。」

「そうだよ、お気に入りのCD。」

岡崎はそう言うと、静かに車を走らせた。

「この前会ったときから思ってたんだけど・・・」

「え?」

「君って、寂しそうだよね、何だか。」

「・・・そうなのかな・・・」

瑤子は、なぜか心が癒されるのを感じた。

「君って、きっといつもひとりなんじゃない?」

「どうして?」

「強がりなんだよ、多分。」

凶星だった。瑤子は強がりだった。きっと、誰にも弱みを見せることが出来ないタイプだった。でも本当は、とても弱いのだ。何も答えない瑤子に向かって、岡崎は言葉を続けた。

「君は、本当はもっと弱いんだと思うよ。」

「どうして・・・わかる・・・の？」

「なんとなく、さ。」

「私は・・・弱くなんかいいわ！」

そう言いながら、なぜか隣の岡崎に寄りかかりたい瑤子だった。

「ねえ、探偵さん、ちょっと聞きたいんだけど。」

「なに？」

瑤子はちよつとドキドキしたが、思い切ってたずねた。

「不倫、とかの調査もやってる？」

「もちろん。」

「そうなの、じゃ、恋人同士の足取りなんかもだいたいわかる？」

「もちろん。」

「・・・」

「君の恋人・・・探す？」

瑤子が、運転席の岡崎の横顔を見ると、彼も自然と瑤子の方を向いた。ウインクすると、

「まかせて。」

と一言言った。何だか面白くなってきた。

瑤子は、弘美と矢崎が一緒に行ってるはずの居酒屋と、弘美の家との位置関係を、岡崎に丁寧に説明した。岡崎は、車を止めると室内灯をつけて、地図を広げた。随分詳しい地図だった。

『探偵ごっこ』なんてテレビでしか見たことがない、と言うと、『ごっこではない』と岡崎に叱られた。確かに彼はプロだった。でも、瑤子からしたら、今回の事は『ごっこ』に過ぎない。弘美と矢崎の浮気現場を見つけたとしたり、それは、別にそれほど瑤子の知りたいことではなかったし、まさかそんなことがあるはずもなかった。瑤子は、矢崎がそんなことをするはずがないと信じていたのだ。でも、本当にそんなことはどうでも良いことだった。

数分地図とにらめっこしていた岡崎は、室内灯を消し、シートベルトをすると、無言で車を走らせた。とにかく車を走らせた。夜のドライブに『サファイア・ブルー』が似合っていた。ナビをセットしながら、運転する岡崎の横顔は真剣そのものだった。

かなりスピードを出しているようだったが、瑤子はそれほど速く感じなかった。ただ、わくわくしていた。2人を乗せたアルファロメオは、裏道をどんどん走っていく。

「道、詳しいのね。」

「仕事柄、裏道は得意さ。」

「なるほどね。」

「あらら、そんなところで感心されても困るんだけど。」

2人は顔を見合わせて笑った。

「俺のタイプだよ。」

「え？なにが？」

「君のように強がり俺のタイプだって事。でも、その遠くを見る寂しそうな目を、何だか俺はほっておけない。」

（一体何を言ってるのよ）瑤子は、思わず無言で、助手席側の窓から暗い町並みを眺めた。ネオンの光と一緒に、暗がりの景色が後ろに飛んでいく。

「もうそろそろだよ。」

瑤子はドキッとした。（どこ？ここ）そう聞こうと思っても、声が出なかった。岡崎はゆっくりとエンジンを止めた。一体今どこにいるのか、瑤子にはさっぱりわからなかった。

「俺のプロの目はどうか？」

そう言いながら、瑤子のほうを向いた。そして、シートベルトをはずしてやった。

「それにしても、こんなに情報の少ない調査もなかなかないよ。」
運転席のドアを開けると、岡崎は車から降りた。瑤子も真似して降

りた。（公園なの？）

「恋人たちって、大体こういうところにくるものなんだよ。」

瑤子は怖かった。でも、ここまできたら、岡崎を信じてついていく以外になかった。公園の周りは、入り口までずっとフェンスと木々で覆われていた。その入り口から、車は遠くに止めたのだ。

「どうしてこんなに遠くに止めたの？」

暗闇の怖い瑤子は、そう岡崎に尋ねた。

「それ、本気で聞いている？」

そう言いながら、瑤子の肩を抱いた。

「いや！何をやるの？」

「馬鹿だな、カモフラージュだ。これも捜査の基本。わかってないね。」

岡崎はニコリともせず、小声で言った。（捜査って・・・なんだ、そうか）

瑤子は息を呑んだ。そして思った。（こんな事態になるのなら、初めから『ごっこ』はするべきではなかった・・・）そんな彼女の気持ちよさに、岡崎は大胆に、かつ、周りにアンテナを張り巡らせながら、瑤子の肩を抱いたまま、どんどん先へ進んでいくのだった。

第十三話 浮気の調査? ? (後書き)

プロの探偵を名乗る岡崎は、依頼人の瑤子を連れて、とある公園に着いた。いよいよクライマックスです。

第十四話 抱擁、そして・・・（前書き）

何となく浮気の調査をすることになってしまった瑤子は、探偵の岡崎の後について、とある公園にやってきた。そこで見たものは・・・？

第十四話 抱擁、そして・・・

少しライトアップされた夜の公園は、とても静かだった。ここまです手を繋いで歩いてきた二人は、まるで本物の恋人同士のようにだった。矢崎の心臓の鼓動は、もしかしたら隣りにいる弘美にも聞こえるのではないかと思うくらいだったし、弘美のほうも、当然同じように、胸が高鳴っていた。

「こうしていると、本当の恋人同士みたいで嬉しい・・・」
ベンチに座ると、弘美が囁いた。矢崎は無言だった。

『もしかしたら瑤子、誰かと一緒にコンサート行ってるのかもしれないわよ。』

矢崎は、さつき居酒屋で弘美が言ったことが、頭から離れなかった。そんなわけではないだろう、と言い返したかったが、なぜか、できなかった。それは、弘美の思ったとおり、このところ二人の間がしっくりいってなかったからだだった。

弘美は、矢崎の右手を、両方の掌でそっと包んだ。

「大きな手ね。」

そうつぶやくと、その手を静かに持ち上げて、そっと口づけした。

「・・・弘美・・・」

矢崎は、弘美をいとおしいと思った。どんどん弘美の存在が自分の中で大きくなってくる。このままいつそ・・・そう思う反面、理性が働いて、それ以上身動きが取れなかった。

公園の柵の向こうに、人影が見えた。

（うそ・・・）弘美は目を疑った。（瑤子・・・？）弘美は、肩を抱き合うカップルを、ずっと目で追った。信じられないが、女性のほうは瑤子に似ていた。（まさか・・・）男性は、弘美の全く知らない人だった。（うそでしょ・・・）どう見ても、確かに瑤子だった。し

かも、弘美から見える二人の影は、矢崎の角度からは丁度見えないらしかった。そして、まだ柵の向こう側にいる瑤子も、弘美たちの存在に気づいていないらしかった。（もしかして、こっちに来るのかも・・・）弘美は息を呑んだ。そして、急に立ち上がった。

「どうしたの？」

矢崎が驚いて声を出した。弘美はだまっただまま矢崎の肩をつかんで、自分のほうに向けた。（やっぱり瑤子だわ）左の方の公園の入り口から、瑤子と見知らぬ男性が、そーっとこっちの方をうかがっているらしかった。

咄嗟に弘美は矢崎の首に腕を回した。自然と矢崎も弘美の腰に手を回す形になった。（なんて幸運なのかしら）弘美は呟いた。

「ね、矢崎さん・・・」

「なに？」

「キスしてくれない？」

「え？」

矢崎は一瞬戸惑った。しかし、背伸びをする弘美の唇の誘惑に、矢崎はつい負けてしまった。少し震えながら弘美の肩を抱き、優しくキスをする、弘美は矢崎に身をゆだねた。

岡崎は、公園のベンチに恋人同士を見つけると、目配せして瑤子に知らせた。そして耳元で囁いた。

「どう？あのふたり」

瑤子は足を止めて、じっと目を凝らして抱き合う恋人同士を見つめた。木の陰からそっとのぞくように見たので、あまり良く見えなかった。

抱き合う二人は、何度もキスを交わした。そして、少しずつ二人の体が動いた。弘美が足を動かし、瑤子に見えるように、わざと二人の角度を変えたのだ。完全に後ろ向きだった男性の横顔が、瞬間

にライトに照らされ、それが矢崎だとはっきり確認された。

「バサッ！」

瑤子は手に持っていたバッグを地面に落とした。その音に気づいた矢崎は、弘美から体を離し、音の方に振り返った。

「よう・・・こ・・・？うそだろ・・・」

矢崎は心臓が止まりそうだった。

岡崎は、急いで瑤子を抱きかかえ、公園から出ようとしたが、彼女の足は動かなかった。

「どうして・・・どういふことなの・・・」

瑤子の目からは、涙が零れ落ちていた。

弘美は冷静だった。

「ね、矢崎さん、やっぱりひとりじゃなかったでしょ？」

矢崎は信じられなかった。(俺は瑤子に騙されていたのか) 弘美の言うとおり、瑤子は一人でコンサートに行っていたのではなかったのだ。(ね？だから言ったでしょ？) 弘美は心の中で呟いた。

「違うんだ、瑤子！」

矢崎は叫んだ。でも、もう遅かった。瑤子は泣きながら、後ろを振り返ると、公園から走り去った。慌てて岡崎が追いかけた。その二人の後姿を見ながらも、矢崎はなぜか瑤子の後を追いかけることをしなかった。それどころか、だんだんと怒りがこみ上げてきた。(あの男はいったいだれなんだ！・・・)

弘美は、この意外な展開に、一人微笑んだ。(本当に、何という幸運なのかしら・・・)

第十四話 抱擁、そして・・・（後書き）

夜の公園で、抱き合い、キスを交わす矢崎と弘美。それを見た瑤子と岡崎。それぞれの運命は・・・？

第十五話 言葉はいらない（前書き）

公園で抱き合う弘美と矢崎を見てショックを受けた瑤子。そんな瑤子の心を感じて、岡崎はただ黙って、車を走らせる。

第十五話 言葉はいらない

「悪かったな・・・」

岡崎の言葉に、瑤子は何も答えなかった。ただ黙って車の窓から暗い外をぼんやり眺めていた。静かなバラードが遠くに聞こえる。瑤子は涙も出なかった。ただただ、ボーっとしていた。岡崎の運転する車は、環七を抜けて、細い路地を走っていた。

こんなときに言葉はいらない。慰めもいらない。ただ、自分の気持ちに正直に過ごせる時間と空間が、今の瑤子には必要だった。

少し行ったところのコンビニに車を停めると、コーヒーを買って戻ってきた。黙って瑤子に手渡すと、また車を走らせた。

しばらく走ると、岡崎は自分のマンションの駐車場に車を停めた。

助手席に回ってドアを開けると、瑤子に降りるように促した。岡崎は、そのままゆっくり歩いて駐車場を出ると、向かいのカフェバーに向かった。瑤子は黙ってついていった。

「今日のラリーは最高だったな。」

向かい合って座ると、岡崎が口を開いた。

「あ、そうだったね。そういえば、私たち、ライブ行ってたのよね。」

「そうですよ、瑤子さん（笑）」

「横浜でもまた会ったのが運のつきって訳だな。」

「本当。とんでもない探偵に出会っちゃったものだわ。」

「まったくだな、あはは！」

「あら、笑い事じゃないわよ、もう。」

「そうだな、ごめんごめん。」

注文したビールが二つ運ばれてくると、二人は軽く乾杯をした。

「瑤子さんの事だから、どうせ強がっちゃうんでしょ。」

「あら、悪い？」

「悪くはないよ。それでいいんじゃない？」

（それでいいんじゃない？・・・か）妙に心に響く言葉だった。自分に正直に生かれる言葉だった。

「ありがとう。」

「いや、別にその、お礼言われなくてもいいんだよ、でも、ここは驕るよ。ついでに宿も提供するよ。」

「やだな、何言ってるの？（笑）」

岡崎はビールを一気に飲み干すと、瑤子に向かってしみじみ言った。
「無理しなくていいよ。使ってない部屋があるんだ。そこに寝ればいい。シャワーだってあるし。」

戸惑いながらも、なぜか断れない瑤子だった。

「ね・・・」

「・・・なに？」

岡崎はちよつと緊張しながら答えた。

瑤子は爽やかに笑みながら言った。

「パジャマがほしいんだけど。どこかに売ってないかしら。ついでにハブラシも。」

岡崎は笑った。

「まかせといて！」

そう言うと、伝票を握り締めてレジに向かった。

「あ、ちょ、ちよつと待ってよ、まだビール飲み終わってないのに」

瑤子は残ったビールを一気に飲み干すと、慌てて席を立って、岡崎の後を追った。会計をカードでさっと支払い終えた彼は、早歩きで、また駐車場に向かっていた。瑤子も、横切る車を2台待ってから、慌てて追いかけた。

「待つてよ」

そう叫びながら、心地よい夜の風を身体に受け、瑤子の心はなぜか開放感に浸っていた。

第十五話 言葉はいらない（後書き）

瑤子の心に、そつと寄り添う岡崎。弘美と矢崎は？・・・そして、瑤子と岡崎は？新しい展開に、『戸惑い』いよいよ最終回です。

第十六話 エピローグ（前書き）

岡崎は瑤子の心を感じた。瑤子の本当の気持ちがとてもよくわかった。ただ黙って、そつと瑤子の心に寄り添う岡崎の優しさに、瑤子は・・・

第十六話 エピローグ

「おはよう！」

「・・・あ、瑠子・・・おはよう・・・」

月曜日。何事もなかったかのように、会社で瑠子が弘美に声をかけた。弘美は、ちょっと戸惑っていた。あの夜、そう、あの金曜日から、2日がたった。そしてその間、瑠子は弘美と何も話していない。

「ねえ、瑠子。」

「なに？」

「ごめんね・・・」

瑠子は一瞬顔が曇ったが、そんな素振りを弘美に悟られたくなくて、ポーカーフェイスで話を続けた。

「いいのよ、なんとも思っていないから。」

そう言いながら微笑む瑠子に、弘美の顔は戸惑いの色を隠せなかった。（なんとも思っていない、ですって・・・？）弘美は思った。瑠子と矢崎の関係は、本当に冷めていたのだろうか。それとも、瑠子の強がりなのだろうか。まるで弘美にはわからなかった。あの日別れてから、矢崎と弘美は一言も話をしていないのだ。一体矢崎は、瑠子の事をどう思っているのだろうか。

『瑠子、ごめん。その・・・誤解なんだ。弘美とはなんでもないんだよ。』

あの夜、矢崎からメールが届いた。『私は大丈夫よ。気にしないで。弘美の事よろしくね。弘美、ああ見えても弱いんだから。泣かしちゃだめよ。』岡崎のマンションで、ラリーカールトンのライブのDVDを見ながら、そう返信した。岡崎が入れてくれたワインを飲みながら、ブラウン管の中のラリーを見て、瑠子は言った。

「ラリーさん、若いね。でも、本物のほうが素敵だった。大人の男の魅力ね。」

岡崎は笑った。

「本当だな。ラリーもあの命に及ぶ事故のあと、良く復活したよな。」

「そうそう。本当にね。人生っていろいろあるものだわ・・・」
ワインを一口飲むと、瑤子は微笑んだ。買ったばかりのパジャマは、少し大きかった。ブルーのストライプが、いかにもパジャマという感じだった。紳士用しかなかったので、それでもなるべく小さいのを選んだ。それにしても、下ろしたてのパジャマはとても心地よかった。

あれから2日。矢崎からの返信メールは来なかった。きっと怒っているのだろう。でも、瑤子にとってそれは好都合だった。弘美にも自分の気持ちえをはっきり伝えることができたし、何ももうなかった。

「瑤子さん、あなたっていう人は、どこまで自分を殺して生きていくんですか？」

「いいえ、探偵さん。私は、正直よ。自分の心に正直なの。」

「でも、周りは気づいてないんじゃないかな？」

「周り・・・？ いいの、別に。誰に気づいてもらえなくても・・・。」

「ほらほら・・・またそうやって、遠くを見てる。」

「え？」

静かに時間が過ぎていった。瑤子はとても穏やかだった。隣りにいるのは、なぜか矢崎ではなく岡崎だ。何も多くは語らない。ただ、ラリー・カールトンのギターの響きと、おいしいワインが、瑤子の心と体に染み入っていた。

「大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ。」

瑤子の頬を、一筋の涙が伝わった。岡崎は見ても見ぬふりをした。

「ね、瑤子さん。」

「なんですか？」

「良かったら、来年もラリーのステージ、一緒に見ませんか？」

「東京？」

「東京も、横浜も。」

そう言いながら、岡崎は優しく微笑んだ。

第十六話 エピローグ（後書き）

本当の自分に気づいてくれる人が、あなたのそばにはいらっしやいますか？そんな出会いがあったなら、きっと人生は大きく変わっていくことでしょう・・・。＜b r＞＜b r＞最後まで読んでくださいますて、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1077a/>

戸惑い

2010年10月13日03時20分発行